

SDGs とパリ協定

中山 寿美枝 (なかやま すみえ) 電源開発株式会社 経営企画部 審議役

「SDG」と「パリ協定」は、最近では新聞やTV報道で見かけない日はないほどよく目にする言葉である。一部の報道では、この2つをほぼ同意義に捉えている発言や記載が見られる。もしかしたら、どちらも環境に関連するキーワードというイメージだけが先行していて、本当のところよくわからない、区別がつかないという人もいるのではないだろうか。実際には、SDG（正しくはSDGs）とパリ協定は、どちらも国連機関で2015年に採択されたという共通点はあるが、その内容、性格は大きく異なるものである。今回はこのSDGsとパリ協定について、それぞれの内容と関係性をファクトベースで説明する。

1. はじめに

SDGsとパリ協定はどちらも2015年生まれである。2015年9月、国連持続可能開発サミットにおいて「持続可能開発2030アジェンダ」が採択され、その中で2030年までの達成を目指す17の持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）が定められた。地球に暮らす万人が影響を受ける気候変動への取り組みは13番目のSDGとして位置付けられた。そして、同年11月に開催された国連気候変動枠組み条約の第21回締約国会議（COP21）では、途上国を含む全ての締約国が各自の削減目標の達成に向けて取り組むこと、長期的には温度上昇を2℃より十分低い温度に抑えること、1.5℃も視野に入れること、などを記したパリ協定が採択され、異例のスピードで2016年11月に発効した。

時期を同じくして国連の会議で誕生したSDGsとパリ協定であるが、前者は国連サミットが採択した持続可能な開発を目指す広範囲な目標であり、後者は国連気候変動枠組条約の下での気候変動への取り組みに関する国際条約である、というようにカバレッジも法的拘束力も大きく異なっている。しかしながら、昨今、SDGsとパリ協定をいっしょくたに扱う報道や、有識者と呼ばれる人達にも両者を同一視するような発言が散見される。「低炭素化⇒パリ協定⇒2℃目標⇒サステナブル⇒SDGs」という連想ゲームが、誤って等式化され、更に「低炭素化=パリ協定=SDGs」と単純化されて蔓延してしまっているかのようである。

連載第2回で「必ずしも2℃シナリオ=サステナブルではない」ことをWEO2019の2℃シナリオの前提

条件から明らかにしたが、今回は、SDGsとパリ協定について、この二つが単純にイコールで結ばれるわけではないことを示したい。両者の背景や目的、性質および内容について、正しく理解を深めることには、意味があることだと思う。

2. SDGs

2015年9月の国連持続可能な開発サミットで「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」（通称2030アジェンダ）が採択され、翌年1月1日から発効した。その中で定められている国連加盟国全体で2030年の達成を目指す17の目標がSDGsである。実は、SDGsには前身があるのをご存じだろうか。それは、2015年の達成を目指した国連のミレニアム持続可能開発目標（MDGs）である。MDGsは2000年に開催された国連ミレニアムサミットで、極端な貧困を削減し、安全でより繁栄した公平な世界を建設するための新たなグローバルなパートナーシップに対するコミットメントとして採択された「ミレニアム宣言」をベースとした目標であり、「持続可能な開発」のための貧困撲滅、格差解消を始めとする8項目の目標である¹。

ミレニアム宣言もMDGsも、採択された直後は大きなニュースになったので読者の記憶にもあるかもしれないが、その結果についてはあまり知られていないのではないだろうか。MDGsについては、その達成目標年である2015年の7月に、国連事務局長が進捗状況を報告した。それは、極端な貧困を47%（1990年）から14%（2015年）に低下させ、5歳以下の死亡率